

看護大学生の特性的自己効力感が学習意欲に与える影響—学年間の比較—

澤村莉香子、本間夏子、佐藤信枝
新潟医療福祉大学 看護学科

【背景・目的】日々発展する医療及び看護のニーズに対応するためには、生涯にわたり幅広い知識を主体的に学ぶ学習意欲が不可欠であり、学習意欲は看護生涯学習の基盤となっている。「看護学教育の在り方に関する検討会報告」では、到達目標を示すにあたっての学士過程における看護学教育の特質として「看護生涯学習の出発点となる基礎能力を培う過程である」ということが挙げられており、生涯にわたり専門性を深めていくための基礎能力を確実に培っておくこと、すなわち看護生涯学習の基盤を創ることが大切であると述べられている。一方、特性的自己効力感は困難や課題に直面した際に対処しようとする努力の程度に影響を与えると報告されており、生涯学習を継続していくことは特性的自己効力感が関係していると考えられる。

当大学看護学生の実態を知ることで、看護生涯学習の基盤すなわち学習意欲に対して特性的自己効力感がどのような影響を与えるのか、関連性を検証することで、4年間の学生生活を充実するための看護基礎教育に貢献する。

【方法】

- 1)研究対象:本学看護学科 1～4年生、計 356 名。
- 2)データ収集方法:全対象に対して無記名によるアンケート調査を行った。
- 3)データ収集期間:平成 29 年 7 月
- 4)調査尺度
 - (1)特性的自己効力感:成田らの特性的自己効力感尺度 23 項目の調査用紙を使用した。
 - (2)学習意欲:永嶋が作成した看護学生の学習意欲に関する項目 35 の因子分析の結果、因子負荷量 0.4 以下を削除し、質問項目 28 に改訂した調査用紙を使用した。
- 5)分析方法
 - (1)特性的自己効力感尺度 23 項目の個人得点の素点の合計から平均値と標準偏差値を算出した。
 - (2)学習意欲に関する SD 法 28 項目の項目平均値と中央値、標準偏差値を算出した。

【結果】

- 1)対象

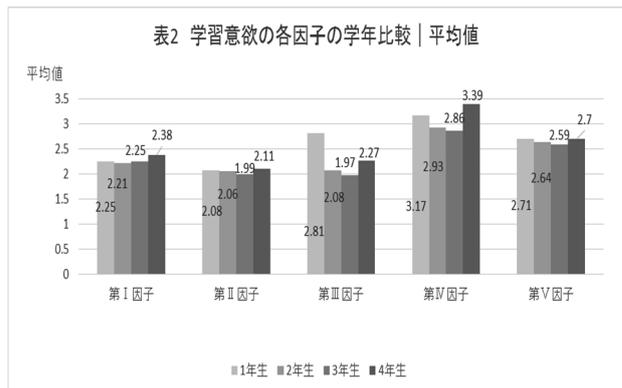
分析対象者は、計 315 名、有効回答率 91.8%、内訳は 1 年生 85 名(有効回答率 98.8%)、2 年生 77 名(有効回答率 83.7%)、3 年生 74 名(有効回答率 92.5%)、4 年生 79 名(有効回答率 92.9%)であった。
- 2)特性的自己効力感の学年比較

1 年生が最も高く、次いで 4 年生が高かった。最も低かったのは 3 年生であった。(表 1)

3)学習意欲の学年比較

表 1 特性的自己効力感の学年比較

	平均値	SD
1 年生	72.19	11.27
2 年生	70.31	11.23
3 年生	68.08	13.01
4 年生	72.18	9.41
全体	70.69	11.40



第 I 因子「学習態度」、第 II 因子「リーダーシップ役割の受容」、第 IV 因子「将来に対する展望」の 4 つの因子で 4 年生が最も高い結果となった。第 III 因子「演習・実習への期待」は 1 年生が最も高かった。第 V 因子「小集団学習への適性」は、わずかに 4 年生より 1 年生の方が高かった。(表 2)

【考察】特性的自己効力感は、1 年生が最も高く、2・3 年生は低く、4 年生で再び高い傾向である。1 年生は学内で演習が開始されておらず、今後への期待が特性的自己効力感へと繋がっているのではないかと考えられる。3 年生は、領域別実習が開始される前であり、長期間にわたる実習への不安から他学年と比較し、自己効力感も低下しているのではないかと予測される。4 年生は大半の学生が 4 年間の全ての実習を終了しており、今までの成功体験や達成感が自己効力感へ繋がっていると考えられる。

学習意欲は「学習態度」、「リーダーシップ役割の受容」、「将来に対する展望」の 3 つの因子で 4 年生が最も高い結果となったが、4 年生は自ら学習を行う習慣が身につけており、実習を行うなかでリーダーを務め、就職先の希望が明らかになっているためであると示唆される。

【結論】特性的自己効力感は、1 年生が最も高く、2・3 年生は低く、4 年生で再び高い傾向が見られた。

学習意欲の第 I 因子「学習態度」、第 II 因子「リーダーシップ役割の受容」、第 IV 因子「将来に対する展望」の 3 の因子で 4 年生が最も高い結果となった。第 III 因子「演習・実習への期待」は 1 年生が最も高かった。